

Press Release

2025 年 9 月 吉日

公益財団法人日本オペラ振興会 <https://www.jof.or.jp>

未来につなげ、いのちの木

日本オペラ振興会総監督 郡 愛子

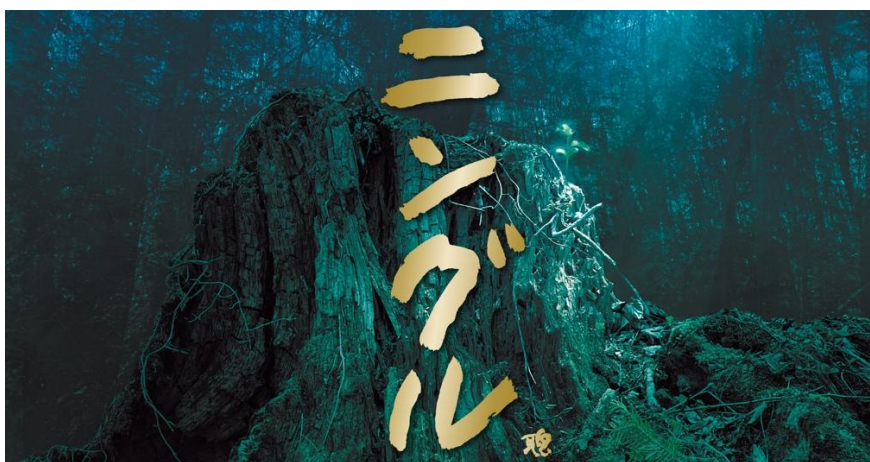
倉本 聰 原作

渡辺俊幸 作曲／吉田雄生 オペラ脚本

「ニングル」

Ninguru

オペラ全 2 幕 〈字幕（日本語／英語）付き原語（日本語）上演〉



2025 年 9月20 日(土) 14:00 開演

昭和女子大学人見記念講堂

【開場 13:00】＊13:30 から会場内にて作品解説をいたします。※上演時間：約 2 時間 30 分

- 主催：公益財団法人日本オペラ振興会
- 特別協力：昭和女子大学、一般社団法人倉本財団
- 協力：太鼓芸能集団 鼓童

本公演に関するお問い合わせ、および取材のお申込み

公益財団法人日本オペラ振興会 広報担当：外山・堀内

〒215-0035 神奈川県川崎市麻生区黒川 76-1

Tel: 044-819-5505／E-mail: press@jof.or.jp

再びオペラとして蘇る——
倉本聰の名作、待望の再演へ

2024年2月に世界初演し、感動のスタンディングオベーションに包まれた日本オペラ協会公演「ニングル」が、この度、待望の再演を迎えます。

暮らしを豊かにするために森を切り開き、発展を信じた人々が”生命の木”の教えに触れ、再生と共存の道を見出す姿は、現代を生きる私たちに深い問いを投げかけます。

「昔に返せ」「未来につなげ」——この二つの願いが交錯する舞台を再び、日本オペラ協会の想いと共に皆様にお届けします。

〈ものがたり〉

第1幕

北海道富良野岳の山裾に広がる原生林。森に囲まれたそこにピエベツという開拓者の村がある。勇太（ユタ）と才三、光介と信次をはじめとする村の若者たちは、この森を伐採し農地を拡大する計画を進めてきた。

「農地が広がれば、村が豊かになる」彼らはそう信じていた。

ようやくその計画がまとまった頃、勇太とかやの結婚式が行われた。かやは仲間の光介の姉。才三の嫁ミクリは勇太の妹。つまり彼らは家族も同然だった。

ユタはかやとの結婚式の夜、親友の才三、姪で口がきけないスカンポと共にピエベツの森を訪れた。そこで不思議な生き物と遭遇した。



体長15センチくらいの小さな人間。

アイヌの先住民たちはかれらを“ニングル”と呼んだ。アイヌの言葉で“ニン”は“小さい”、“グル”は“人”という意味である。口の聞けないスカンポだけがニングルの言葉を理解できた。

その時、ニングルの長は、彼らにこう告げたのだ。

「森を伐るな、伐ったら村は滅びる——」



ユタと才三はピエベツの森の伐採を計画し、農地開発を推進してき中心人物である。いまさら後戻りできないとユタはニングルに逢ったこともないと主張した。一方で才三はニングルの言葉に衝撃を受ける。たびたびスカンポと共に森を訪れ、ニングルの言葉に耳を傾け始めた。そして、森を守らなければ村の将来はないと考え、それまでの意見を翻して農地開発の反対を訴え始める。

伐採を拒否する才三と農地開発を推進するユタ。二人は完全に対立してしまう。

民吉は息子のユタの行動を案じている。時折、亡くなったかつらに向かって問いかける。

「なあ、かつら、教えてくれ、豊ってなんなんじゃ」

かつらは民吉の長女で、スカンポの母である。

ある時、民吉はスカンポに「生命の木」の話を聞かせる。

「子供が生まれるとその子の木を植えた 親は子に教えたもンさ

“これがお前の木だ、大事に育てろ この木が枯れるときはお前が死ぬときだ”」

かつらは、二人を空から見守っている。そして、こう歌う。

「もしも、木の実を握っている子が生まれたらそれが希望」だ、と。

開発に反対し、森の伐採には協力しない才三は孤立を深める。仲間の光介や信二ですら、才三をかばうことはなかった。

伐採が始まり 2 年が経った。村は、ニングルが予言した通り、破滅に向かいはじめた。

大洪水が起こり作物は流され、村の人々の借金ばかりが膨らんでいった。

光介は亡父の仏前で自らの過ちを告白する。実は光介もニングルに逢っていたのだ。しかし、そのことをみんなには云えず、才三を孤立させてしまった。その上、借金が膨らみ夜も眠れない。泣きながら告白する光介に亡き父が憑依する。

「貧しくても幸せだったあの頃に、もう一度戻れ」。

心を病んだ光介は精神病院に運び込まれてしまう。

大洪水の後は渇水だった。かつて森に囲まれたピエベツは水が潤沢あった。その大切な水が、森の伐採により枯れてしまったのである。

村の人々は井戸掘り屋を雇うが、水はなかなか出ない。

才三はスカンポと共にニングルの教えてくれたやり方で水の出る場所を探しあてた。しかし、そのことが原因となって、才三とユタは口論となる。激高したユタは才三を激しく殴りつけ、チェーンソーを押し付け、云う。

「才三、山へ行って木を伐ってこい。お前の女房を泣かせるな」

一人山へ行った才三は、自ら伐った木の下敷きになって命を絶ってしまう――。



第2幕

才三の死によってユタは自責の念にかられる。同時に自分の生活も追いつめられていく。借金を返せなくなり、家も土地も捨てて出て行けと村の人から迫られたのだ。そんな中、妻のかやが子どもを身籠った。

「自分はもうどうしたらいいのか――」絶望し無口になっていくユタ。

精神病から退院した光介と信二は、才三とスカンポが探しあてた場所で、井戸を掘り始める。来る日も来る日も、周りが呆れるほど、ひたすら掘り続けた。硬い岩盤から水が出るはずもないと陰口もたたかれた。

ところが、ある日。その場所から、遂に水が出たのだ！

「何もかも才三の云った通りになった」

ユタは才三が亡くなった森を彷徨う。そこで、再びニングルの長に遭遇する。

ニングルの長は才三にこう告げる。

「未来につなげ。ゆっくり時間をかけて、森を昔に返せ」

「お前の親父の民吉も自らの『生命の木』を伐って、未来につなごうとしている」。

その言葉通り、自分の「命の木」を伐り死を選んだ民吉もまたニングルが憑依したように才三にこう語りかける。

「その水は誰がくれたか判りますか？その水は森が何千年もかかって貯えた水。

昔に、昔に返せ、森を。昔に返せ、ピエベツを」

民吉の死と引き換えにスカンポは声を取り戻した。



ようやくニングルの言葉に耳を傾けたユタは一人黙々と朽ち木を森に運びはじめた。長く地道な作業をひたすら繰り返すユタ。

ある日、スカンボが大慌てで、ユタをのものとやってきて叫ぶ。

「ユタおじちゃん、赤ちゃんが生まれたよ、その子、手にドングリを握ってた！」

未来への希望の種が生まれたのだ。

(吉田雄生)

〈見どころ・聴きどころ〉

『ニングル』は、ドラマ「北の国から」などで知られる脚本家の倉本聰が 1985 年に書いた作品で、朗読劇や舞台作品として何度も上演されてきた倉本の代表作。2024 年 2 月、日本オペラ協会はこれを初めてオペラとして上演した。作曲は、2005 年放送の倉本脚本のドラマ『優しい時間』の音楽をはじめ、数々のドラマや映画の劇伴を手がけてきた渡辺俊幸。そして、ニッポン放送でラジオドラマの制作などを手がけてきた、倉本の信任厚い吉田雄生が脚本を書いた。初演は、倉本作品初のオペラ化としても大きな話題を呼んだ。

富良野地方の森に暮らすニングルは、身長が 15 センチほどの「小さな人間」。富良野岳の麓の村ピエベツに暮らす勇太（ユタ）と才三たち若者は、もっと村を豊かにするために、森を開拓して畑にしようとしていた。しかし、偶然森で出会ったニングルの長から「森を伐るな、伐ったら村は滅びる」と警告される。開発計画の中心にいるユタは今さら計画を反故にできないと、ニングルの存在を否定するが、才三はニングルの言葉を信じたため、次第に村で孤立していく。開発が始まった数年後、村は大洪水に襲われた後に水が出なくなり、ニングルの長の言葉通り危機に陥ってしまう。

この作品のテーマは、人が生きる上での本当の「豊かさ」とは何か、自然と人とはどのように共存していくべきなのか、ということだろう。地震や洪水、集中豪雨、猛暑など、自然の力を否応なく感じさせる出来事が続いている近年、このテーマは実に身近である。便利に豊かに生きていくために自然を壊してきた人間が、自然からしっぺ返しをくらうという物語は、現実にも今、この地球上のあちこちで起きていることだからだ。生きとし生けるものすべての「いのち」は等しく大切なものであり、人はその「いのち」を守る責務がある。そのことを、わかりやすい言葉と美しい音楽で描いたオペラ『ニングル』。こんな時代だからこそ、もう一度立ち止まって、「いのち」の大切さと人が生きること

の意味について考えてみようではないか。

第1幕

勇太の父・民吉が回すおもちゃから流れる風の音で舞台は幕を開ける。民吉は死んだ娘・かつらの娘で口のきけないスカンポに、昔は星の音が聞こえた、と歌ってきかせる。「自然の大切さ」「本当の豊かさとは」といったドラマのテーマが歌われるこの幕開きは実に印象的だ。

森のなかでユタ、才三、スカンポの3人がニングルに出会うが、最初にニングルが叩く木太鼓の音に気づくのはスカンポで、また彼女だけがニングルの言葉を理解することができる。「口がきけない」というハンディキャップを持っているからこそ、森の木々やニングルという「見えないもの」と人間との橋渡しのような役割を担うスカンポには、言葉のない歌がいくつか与えられているが、いずれも美しく心に残る。

民吉とスカンポが暮らす家には、精霊となったかつらが現れる。かつらは、空に輝く星を通していつも娘を見守っていること、さらに、もし木の実を握った子どもが生まれてきたら、その実を植えて木を育てるようにと歌う。この世には見えなくても生きている「いのち」があると歌うさくらのアリアは、作品中随一の美しい音楽である。

森の伐採が始まり2年。村は大洪水に見舞われて作物が流され、人々には借金だけが増えていく。ユタの仲間である光介も田畑を失い、その惨状に耐えきれず精神を病んでしまう。駐車場を失った田畑だと思い込んで田植えをするシーンは、たいへんに痛ましい。

洪水に続いて、村は渇水に襲われる。才三はニングルに教えてもらったやり方で井戸を掘ろうとするが、そのことが原因でユタと才三は口論となってしまう。怒ったユタは才三にチェーンソーを渡して「妻子のために森へ行行って木を切ってこい」と言い、また才蔵の妻・ミクリも「木を切ってきて」と懇願する。夫を理解したいという思いと生活の苦しさからくる重圧が交錯する、ミクリの悲しくも美しいアリアが響く。

ついに才三は森に入っていく、ニングルや木々たちに対して後悔の思いを歌いかけると、チェーンソーで切り倒した大木の下敷きとなって死んでしまう。才三の絶唱ともいえるアリアは第1幕最大の聴かせどころ。また、目に見えない森の精を踊るダンサーたちと才三との絶妙な距離感にもご注目いただきたい。

第2幕

精神病院を退院した光介は、才三が示した場所で水を掘り当てる。今や自分も家や畑も失いかけているユタは絶望に駆られて森をさまようが、そこでニングルの長と出会う。長は「ゆっくり時間をかけて森を元に戻せ。未来につなげ」と語りかける。

民吉は自らの命を断つことで、スカンポに声を取り戻される。民吉の墓の前で、スカンポは初めて言葉を持ったアリアを歌うが、「口がきけるようになってニングルの声が聞こえなくなった」という箇所は、彼女が「目に見えないもの」と人間との橋渡しの役割を終え、人間の世界の住人となったことを示しているようだ。

ユタに子どもが生まれるが、その子がかつらが予言したようにドングリの実を握って生まれてくる。ユタは「今からでも遅くはない、もう一度あの頃の森を取り戻すのだ」と歌い上げる。フィナーレは舞台上に、死者たち、木々たち、ニングル、そして人間たちすべてが登場し、交錯するシーンとなる。そして最後に星が降る音が響くことで、第1幕冒頭の民吉の歌と繋がる。こうして物語はひとつの円環をかたちづくることになる。

●チケット好評発売中！

S 席 ¥15,000 A 席 ¥12,000 B 席 ¥8,000 C 席 ¥3,000 (税込)

・ヤング・フレッシュマンチケット

S 席～B 席：半額 (25 歳以下／枚数限定)

・障がい者割引

S 席～B 席：20%割引 (要お問い合わせ／枚数限定)

●お問い合わせ・予約

日本オペラ振興会チケットセンター 044-819-5550 (平日 10:00～18:00)

【座席選択可・PC&スマートフォン】

〈主要キャスト・スタッフプロフィール〉

指揮 田中祐子

Yuko TANAKA

平成 30 年度(第 29 回)五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。受賞に伴い 2019 年渡仏。2020 年度ローム ミュージック フォーメン奨学生。パリにて更なる研鑽と演奏活動を継続する。東京藝術大学大学院指揮科修士課程首席修了。2012 年より渡独し主にベルリンとミュンヘンにて研鑽を積む。東京国際 コンクール「指揮」入選、プザンソン国際指揮者コンクール、ショルティ国際指揮者コンクールのセミファイナリスト。2013 年クロアチア国立歌劇場リエカ管弦楽団に招かれ海外デビュー。これまでに、全国各地のオーケストラと共演を重ねる。日生劇場、東京室内歌劇場、日本オペラ振興会等都内のオペラ団体にて副指揮、プロンプターとしてオペラ研鑽を積み、2015 年藤原歌劇団公演「ラ・トラヴィアータ」でオペラデビュー、2017 年日本オペラ協会公演「よさこい節」(於:新国立劇場)、2018 年名古屋二期会公演「ちゃんちき」、2019 年日本オペラ協会公演創立 60 周年記念公演「静と義経」、23 年藤原歌劇団公演「二人のフォスカリ」、24 年日本オペラ協会公演「ニングル」、25 年日本オペラ協会公演「静と義経」に登壇するなど、オペラ指揮者としても着実に実績を挙げている。2015-16-17 年シーズン NHK 交響楽団首席指揮者 P.ヤルヴィ公式アシスタント。その間、同団において C.デュトワ、C.エッシェンバッハ、M.ヤノフスキをはじめ数々の公演のアシスタントおよび合唱指揮を担当。チョン・ミンファン指揮東京フィル公演の合唱指揮も担当した。2018 年～2020 年オーケストラ・アンサンブル金沢指揮者。NHK-E テレ「らららクラシック」や NHK-FM「名曲アルバム」、日テレ「読響シンフォニックライブ」、テレ朝「題名のない音楽会」等、メディア出演多数。



演出 岩田達宗

Tatsuji IWATA

東京外国語大学フランス語学科卒業。劇団「第三舞台」を経て、舞台監督集団ザ・スタッフに参加し、オペラの舞台製作にかかわる。1991 年より栗山昌良氏に演出助手として師事。五島記念文化財団奨学生として 98 年より欧州各地で研鑽を積む。帰国後、本格的に演出家として活動を始め、新古典主義の作品から現代の日本オペラまで数多くの公演で高い評価を得る。日本オペラ協会では 01 年「キジムナー時を翔ける」でデビュー以降「葵上」「美女と野獣」「天守物語」「よさこい節」「夕鶴」等、藤原歌劇団では 07 年「ラ・ボエーム」で初演出以降「ラ・ジョコンダ」「ルチア」「夢遊病の女」「ラ・トラヴィアータ」「カルメン」「ドン・ジョヴァンニ」を手掛け、独創的で卓抜なアイデアによる舞台造りは聴衆を魅了し続けている。リモートによる講義「岩田達宗道場」が開講されるなど、現在日本を代表するオペラ演出家の一人である。



07 年よりいずみホール・オペラのプロデューサー、21 年よりひろしまオペラルネッサンスの芸術監督を務めている。第 7 回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。06 年度音楽クリティック・クラブ賞受賞。大阪音楽大学客員教授。武蔵野音楽大学特任教授。兵庫県出身

勇太役 須藤慎吾

Shingo SUDO

国立音楽大学卒業、同大学大学院修了。1999~06 年渡伊。第 10 回オルヴィエート国際オペラコンクール第 2 位。第 37 回イタリア声楽コンコルソ・シエナ大賞受賞。第 42 回日伊声楽コンコルソ第 1 位、同時に歌曲賞受賞。伯田好史、故・田島好一、L.サッコマニの各氏に師事。国立音楽大学大学院オペラ「ドン・ジョヴァンニ」のタイトルロールでデビュー。7 年間の在伊中、イタリア各地の劇場で数多くのオペラ に出演。日本オペラ協会には、24 年「ニングル」勇太(ユタ)で初登場し、「静と義経」頼朝で出演し好評を博している。藤原歌劇団には、08 年「ラ・ボエーム」のマルチェッロで出演以降、「愛の妙薬」ベルコーレ、「ルチア」エンリーコ、「フィガロの結婚」アルマヴィーヴァ伯爵、「ラ・トラヴィアータ」ジェルモン、「トスカ」スカルピア、「カルメン」エスカミーリョ、「道化師」トニオ、「リゴレット」タイトルロール、「イル・トロヴァトーレ」ルーナ伯爵で出演。新国立劇場でも活躍しており、「蝶々夫人」「椿姫」「ルチア」等のプリモ・バリトンに抜擢され好評を得るほか、日生劇場「フィデリオ」ドン・ピツァロ、「トスカ」スカルピア、「カプレーティ家とモンテッキ家」ロレンツォ、まつもと市民オペラ「ちゃんちき」狐のおとっさまで出演。また、「第九」「カルミナ・ブラーナ」等のソリストや、NHK ニューイヤーオペラコンサートなど多数出演している。日本オペラ協会会員。藤原歌劇団団員。国立音楽大学非常勤講師。和歌山県出身。<https://operanaut.com>



才三役 海道弘昭

Hiroaki KAIDO

国立音楽大学卒業。2012 年 NPO 事業によりイタリアへ 2 年間留学。どみそグループ専属歌手、NPO 事業演奏研究員。2015 年、サントリーホール等にて動員総数 4,000 名のデビューリサイタルを成功。TV 番組「みんなの音楽会 TV」にレギュラー出演し、L. スッチラ世界的歌手との対談や共演が話題を呼んだ。第 46 回イタリア声楽コンクール・シエナ大賞受賞。第 1 回 V. テッラノーヴァ国際声楽コンクール優勝。日本オペラ協会では、2020 年「紅天女」仏師・一真で大成功を収め、以降 21 年「キジムナー時を翔ける」マサキ、22 年「ミスター・シンデレラ」伊集院正男、「源氏物語」頭中将、24 年「ニングル」才三で出演しており、高い評価を得ている。藤原歌劇団には、21 年「ジャンニ・スキッキ」リヌッチョ、22 年「イル・カンピエッロ」ゾルゼート、23 年「二人のフォスカリ」ヤコポ・フォスカリ、24 年「ピーア・デ・トロメイ」ギーノで出演。キングレコード収録「ベルカントの女王」世界的ソプラノ歌手 M. デヴィーアとの共演オペラアリア集を自身 3 枚目の CD としてリリース。BS12 トゥエルビ「童謡コーラス♪名曲大合唱～今は一人で、みんなと歌えるその日まで～」(毎週:日曜夕方 4 時放送)にて、全国放送 BS 番組のレギュラー出演で活躍の場を広げている。日本オペラ協会会員。藤原歌劇団団員。埼玉県出身。



かつら役 佐藤美枝子

Mieko SATO

武蔵野音楽大学卒業。日本オペラ振興会オペラ歌手育成部第 9 期生修了後、ローマに留学。1997~99 年五島記念文化財団の奨学生として引き続きローマで研鑽を積む。大分県高等学校音楽コンクールをはじめとする数々のコンクールに入賞。第 30 回日伊声楽コンクール第 2 位。第 64 回日本音楽コンクール声楽部門 第 1 位、同時に増沢賞、海外派遣特別賞受賞。第 11 回チャイコフスキー国際音楽コンクール声楽部門第 1 位。1995 年ローマにて「リゴレット」のジルダでデビュー。イタリアで研鑽の傍ら日本でも演奏活動を行い、1999 年新国立劇場に「カルメン」ミカエラでデビュー。日本オペラ協会には、「美女と野獣」「天守物語」「春琴抄」「よさこい節」「夕鶴」「源氏物語」「ニングル」に出演し、いずれも好評を博している。藤原歌劇団には、2000 年「ルチア」のタイトルロールでデビューを飾り、2011 年にも同役で絶賛を博した。その他、「カブレーティ家とモンテッキ家」「イタリアのトルコ人」「ラ・トラヴィアータ」「ランスへの旅」「ラ・ボエーム」「リゴレット」「カルメル会修道女の対話」「オリイ伯爵」「ドン・パスクワレ」「清教徒」などで常に絶賛を浴び、多数作品に出演している。第 7 回五島記念文化賞オペラ新人賞、第 9 回出光音楽賞、第 10 回新日鐵音楽賞フレッシュアーティスト賞、第 2 回ロシヤ歌曲賞、第 3 回下総院一音楽賞、第 50 回 ENEOS 音楽賞洋楽部門本賞受賞。日本オペラ協会会員。藤原歌劇団団員。武蔵野音楽大学教授。大分県立芸術文化短期大学客員教授。大分県出身。



日本オペラ振興会総監督 郡 愛子

日本オペラ協会公演

倉本 聰原作

渡辺俊幸 作曲／吉田雄生 オペラ脚本

「ニングル」

Ninguru

オペラ全2幕 〈字幕（日本語／英語）付き原語（日本語）上演〉

【公演日程】2025年9月20日(土)

【会場】昭和女子大学人見記念講堂

【チケット料金】S席¥15,000 A席¥12,000 B席¥8,000 C席¥3,000（税込）

日本オペラ振興会総監督	郡 愛子
General Artistic Director	Aiko ORI
指揮	田中祐子
Conductor	Yuko TANAKA
演出	岩田達宗
Stage Director	Tatsuji IWATA

勇太（ユタ）	須藤 慎吾
Yuta	Shingo SUDO
才三	海道 弘昭
Saizo	Hiroaki KAIDO
かつら	佐藤 美枝子
Katsura	Mieko SATO
ミクリ	別府 美沙子
Mikuri	Misako BEPPU
スカンポ	中桐 かなえ
Sukanpo	Kanae NAKAGIRI
光介	杉尾 真吾
Kosuke	Shingo SUGIO
信次	黄木 透
Shinji	Toru OKI
民吉	久保田 真澄
Tamikichi	Masumi KUBOTA
ニングルの長（カムイ）	江原 啓之
Older of Ninguru(Kamuy)	Hiroyuki EHARA
かや	丸尾 有香
Kaya	Yuka MARUO
信子	佐藤 恵利
Nobuko	Eri SATO

合唱	日本オペラ協会合唱団 Nihon Opera Kyokai Chorus Group
管弦楽	神奈川フィルハーモニー管弦楽団 Kanagawa Philharmonic Orchestra

合唱指揮	河原 哲也
Chorus Master	Tetsuya KAWAHARA
美術	松尾 紘子
Scenery Designer	Hiroko MATSUO
衣裳	下斗米 大輔
Costume Designer	Daisuke SHIMOTOMAI
照明	大島 祐夫
Lighting Designer	Masao OSHIMA
振付	古賀 豊
Choreographer	Yutaka KOGA
舞台監督	伊藤 潤
Stage Maneger	Jun ITO
副指揮	鎗木蓉馬、森田真喜
Assistant Conductor	Youma KABURAGI / Masaki MORITA
演出助手	三浦奈綾
Assistant Stage Director	Naaya MIURA

公演特設サイト https://www.jof.or.jp/performance/2509_ninguru

【お問い合わせ・予約】

日本オペラ振興会チケットセンター 044-819-5550 (平日 10:00~18:00)

【チケット販売所】

- ・チケットぴあ <https://t.pia.jp/> (Pコード: 297-669)
- ・イープラス <https://eplus.jp>
- ・ローソンチケット <https://l-tike.com/> (Lコード: 35713)
- ・teket <https://teket.jp/9911/49158>